

第一章 今の日本

問題

わたしは、今の日本は何がいちばん問題か、と問われたら、全体的なあきらめムードがいちばん問題だ、と答えます。

中年や老年の大人が希望というものをあまりもっていないから、若い人たちは、生活を人生を社会を、どう考えたらよいかわからず、わたしから視ると、今の若い人たちは、たい

へんかわいそうな状態におかれています。なぜ、こうなっているか。

それを理解するためには、日本と世界の歴史を大きくとらえ返してみる必要があります。

鎖国と黒船

日本の豊臣秀吉の時代より少し前から、日本にヨーロッパの宣教師がやって来ました。日本にキリスト教をひろめることが目的でし

た。これは文化的な目的ですが、それに続いて、日本を経済的に支配しようとする意図が、ヨーロッパの人々にあつたことは、否定できません。

豊臣秀吉に続く徳川家康は、それを察知し、日本は外国との貿易をほとんどしない、鎖国をしました。亀が身を守るために、頭や足や尾を甲羅こうらの中にひっこめたようなものです。

日本は四方を海に囲まれ、当時のヨーロッパの軍事力では、日本に攻め込み、日本に貿

易を強要することは、無理でした。

あとは、徳川家康は、国内を軍事的に安定させるしくみを創りました。その結果、二百六十五年間という長い江戸時代において、日本独自の文化が発達しました。松尾芭蕉の俳句や寿司という食べ物、その象徴です。

ところが、一八五三年にアメリカの軍人ペリーが、今の神奈川県神奈川県の浦賀へ、黒船四隻でやって来ました。

事態は逆転しました。

ヨーロッパやアメリカの船は、徳川家康のころと異り、丈夫な鉄の船に、大砲という武器を積めるようになりました。船に大砲を積みなければ、日本へ海岸から攻め込むことは、たいへん難しかった。でも、船に大砲を積めるようになると、ヨーロッパやアメリカは、逆に、日本の海岸のどこからでも、攻め込めるようになりました。軍艦の発達により、四方を海に囲まれた日本は、たいへん安全な国から、まったく無防備な国へ、逆転しました。



ヨーロッパやアメリカがそういう軍艦を造れるようになったのは、日本の徳川家康より後年に生れた、フランスのデカルトやイギリスのニュートンが、大きなさきがけとなり、数学や物理学をすばらしく発達させていたからです。

江戸時代末期の日本の先覚者は、ヨーロッパやアメリカの数学や物理学を学び、経済や政治を学び、日本もヨーロッパやアメリカに對抗できる軍事力をもたないと、ヨーロッパ

やアメリカから経済的に支配されるだけだという、厳しい現実を悟りました。

徳川幕府内にいた勝海舟も、徳川幕府を倒そうとした西郷隆盛や坂本竜馬も、日本がなるべく平和に新しい政治経済体制へ移行できるように、真剣に工夫し、実行しました。

脱亜入欧

実は江戸時代までの日本人は、中国人や朝鮮人を、アジア内の先進国人として、尊敬し

ていました。しかし、日本はヨーロッパやアメリカに学ばないと、ヨーロッパやアメリカ

から経済的に支配されるだけだという、厳しい現実を悟り、実際、日本は明治維新以降、ヨーロッパやアメリカに猛烈に学びました。

中国人や朝鮮人は、日本人ほど熱心に、ヨーロッパやアメリカに学ぶことをしませんでした。日本人は、中国人や朝鮮人より、文明人として優れていたのでしょうか。そう思いたい日本人も多く出ましたが、わたしは、そ

れは逆であると、考えます。

日本の文化は江戸時代にかなり発達したものの、世界の歴史において、全体的に比較すると、たとえば中国の古い文明のように、成熟したものでありませんでした。江戸時代までの日本人が、中国人や、中国人に深く影響を受けた朝鮮人を、尊敬していた理由です。

日本人は、文明人として未熟だったからこそ、ヨーロッパやアメリカの異質な文明を猛烈に学ぶことができました。世界の歴史にお

いては、常識ですが、成熟した文明人は、その文明人としての誇りと、思考や情念の固い殻がじゃまして、異質な文明に謙虚に柔軟に学ぶことができません。だから、あれこれ、こじれた戦争も起ります。

明治維新以降の日本人は、ヨーロッパやアメリカから経済的に支配されたくないという、必死の覚悟から、

脱亜入欧

という標語をかかげました。日本人はアジア

から脱してヨーロッパに入る、という意味です。今、日本の一円円札に描かれている、『学問のすゝめ』を書いた、福沢諭吉は、脱亜入欧を推進した中心人物です。

脱亜入欧という標語は、ヨーロッパやアメリカへの学びを早めた一方、悪い面もありました。江戸時代まで日本人が中国人や朝鮮人を尊敬していた裏返しとして、日本人ほど熱心にヨーロッパやアメリカに学ぶ気になれない中国人や朝鮮人を、日本人は軽蔑し始めま



『西洋事情』『学問のすゝめ』
『脱亜論』その他。

一万円札を見つめ直す

した。脱亜入欧という標語が、軽蔑を助長した面があります。

ついに敗戦

脱亜入欧という標語のもと、日本人はヨーロッパやアメリカの、数学や物理学、経済や政治や軍事に、真剣に学びました。でも、ヨーロッパやアメリカの文明の柱である、キリスト教を採り入れることはありませんでした。

日本の第二次世界大戦までの天皇制政府が創った教育体制は、日本古来の神道と中国に学んだ儒教を組み合わせた思想が、その中心でした。

第二次世界大戦は、イギリスやフランスやオランダやアメリカという先進の資本主義国に、イタリアやドイツや日本という後進の資本主義国が戦いを挑み、敗れた戦争です。

徳川家康がヨーロッパ人の意図を察知して鎖国して以来、ヨーロッパやアメリカからの

経済的な支配をまぬがれようと、あれこれ工夫し、実行してきた日本人ですが、ついに、一九四五年八月十五日に、敗戦を認め、アメリカなどに占領されました。

その直前の八月六日と八月九日には、当時の最新の大量破壊兵器である原子爆弾を、アメリカから日本の広島と長崎に試されました。

アメリカ式へ

日本の国家としての牙を抜こうという、ア

メリカの意図と、戦争は良くないという、国際的な理想論と、実際に眼に触れたアメリカ人の文化が予想以上に進んでいたという、日本人の驚き。これらが重なり、日本の新しい憲法には「戦争の放棄」を唱え、日本にアメリカ式の教育制度をかなり採り入れました。

日本は教育体制も軍事体制も、壮大に変化しました。知識人も、まじめな一部の人を除き、戦前に唱えていたことと正反対のことを、論理的な脈絡もなしに平気で唱えました。

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

日本国憲法第九条

とにかく、食べるものも着るものも住むところも絶対的に不足していたから、思想問題はあとまわしにし、アメリカ映画などに出てくるあのアメリカ人の生活水準に一日でも早く近づこうと、日本人は猛烈に働きました。

マルクスについて

ここで、マルクス主義というものに、触れておく必要があるでしょう。

ドイツのカール・マルクス（一八一八〜一

八八三）は、ヘーゲルという哲学者に学びましたが、ヘーゲルとは別の新しい学問を唱えました。世界の歴史を動かす政治や思想も、大局的にみると、民衆の生活の必要により、左右されている。世界の歴史を動かす土台は、結局、民衆の生活の必要である。そして資本主義というものも、世界の民衆の生活の必要により、次の新しい生産体制へ移行していくであろう。これが、マルクスの学問の骨子です。

ヘーゲルはヨーロッパの哲学を集大成した。わたしは、そう判断しています。ドイツ人というのは、よくもここまで、あらゆることを緻密に考えられるものだなと、感心します。そのヘーゲルに真剣に学びつつ、新しい境地を切り拓いたマルクスも、あらゆることを周到に考え抜いています。

しかし、マルクスに深く学んだと自称した、かつてのソ連も東ドイツも中国も、その学びはたいへん浅かった。それらの国は、マルク

スの理想でも何でもなく、それらの国が崩壊したり、別の体制へ移行したりしたのも、歴史の必然であった。わたしは実は、そう考えています。

何を守るか

現代の世界史には、「ソ連はマルクスの理想の国。ソ連が崩壊したから、マルクスの学問は死んだ。」との、深い誤解があると、わたしは考えます。

それにしても、一九九一年までは、アメリカという国とソ連という国が軍事的ににらみあったことは、事実です。日本は、その地理的な位置から、ソ連や中国や北朝鮮に軍事的に対抗する、重要基地として、日本国内にアメリカ軍が基地を設けることを認めました。新しい憲法にかかわらず、自衛隊という組織をもつことになりました。

日本の国家をどう守るかという議論が盛んですが、それ以前に、日本の家庭はこのまま

で良いのか、日本の中小企業はこのままで良いのか。社会の土台の問題が先決であると、わたしは、考えています。日本国を守ると言った場合、どういう生活とどういう文化とどういう制度を守るか、です。

金融敗戦

今は、人にお金を融通する金融というものの、そのしくみが、とても複雑になっています。これは、資本主義という生産体制の末期

症状である。そのように、わたしは判断して
います。日本がようやく、外国との貿易が黒
字になったころの、一九七一年、アメリカの
ニクソン大統領が、ドルと金を結びつけるこ
とをやめると、一方的に宣言しました。貨幣
というものが、価値そのものではなく、価値
を公おおよげに記録したものの、公の記録物の一種類
となった、瞬間でした。

日本がようやく、経済の先進国の仲間入り
をした一九七一年ごろ、アメリカを先頭とす

る世界の経済は、すでに複雑な金融の技術を
追求し始める段階に入っていました。世界の
歴史において、全体的に比較すると、日本民
族は、わりと純情素朴です。すれっからした
文明人のように、複雑な金融の技術をもちか
けて、あわよくば人をだまそう、というこ
ろが弱いのです。

実際の結果として、一九九〇年ごろから、
土地の価格が暴落したり、株式証券の価格が
暴落したり、アメリカ国債（アメリカの国へ

貸したお金）を円として計った価格が暴落し
たり、日本は、金融の敗戦をしました。その
損害を計算すると、日本が第二次世界大戦で
受けた損害に匹敵するとも言われます。

精神的に丸裸

一方、先に書いたように、日本の第二次世
界大戦までの天皇制政府が創った教育体制
は、日本古来の神道と中国に学んだ儒教を組
みあわせた思想が、その中心でした。わりと

多くの日本人がその教育体制を信仰してい
てきました。

しかし、アメリカなどに負けてしまった虚
脱感と、あのアメリカ人の生活水準に一日で
も早く近づこうと、目先の金稼ぎに精神集中
した結果、第二次世界大戦までの教育の影響
は、神道と儒教を組みあわせた思想の影響は、
どんどん風化しました。それに、一九九〇年
ごろからの金融敗戦の虚脱感が、新たに加り
ました。

脱亜入欧とはいうものの、すれっからした
文明人には、もうついていけない。一方、実
は脱亜しきれず、ヨーロッパやアメリカに対
抗するために精神の柱としていた、儒教思想
も、風化した。

日本は、豊臣秀吉の時代より少し前から、
日本にやって来た宣教師より始り、ヨーロッ
パやアメリカという大文明の影響が少しずつ
強まり、それ以前に強く影響を受けていた中
国という大文明との関係が、今は、ちょうど

『人はなぜストーリーカーになるのか』

(文春文庫PLUS)

『ヴァーチャルLOVE』(文春文庫PLUS)

『おひとりさま』(中央公論新社)

儒教が風化した日本の男女の
今を見つめた岩下久美子さん
(2001年急逝)の著作案内

均衡しています。日本はいわば、精神的に丸裸になった状態であると言えます。

ここにおいて、アメリカを選ぶか、中国を選ぶか、ではありません。日本が中国の影響を受ける前の時代のことをよく調べ、その原始的な時代を基礎として、「諸文明人の誇りと、思考や情念の固い殻を少しづつ溶解させていくお世話役」に、純情素朴な日本人は、なれば良い。というより、純情素朴な日本人が、国際的に生き延びる道は、それ以外に

ないと、わたしは判断しています。

原始と未来

日本国は軍備をまったくなくすことができます、などと、甘いことを、わたしは言いません。しかし、戦争なんてもう嫌だと、素朴な悲願において、平和憲法に賛成した日本人も、たいへん多かった。その悲願を現実化する道の追求を、あきらめない。そのことと、今の、日本の家庭の問題や、日本の中小

でしようか。戦争準備産業でない、平和準備産業です。

お金というものにふりまわされて、健康生活と平和社会をなかなか実現できなかった、というのが、資本主義の問題点でした。民衆は、やすらぎ、つまり健康生活と平和社会に飢えています。それへ少しづつ接近していく、新しい学問と新しい芸術に飢えています。

また、資本主義が、次の新しい生産体制へ移行していく際、お金の争いを知らない、原

企業の問題を解決することは、同じです。わたしはそう思います。日本民族としてのやすらぎを確保し、諸民族調和へのお世話役を事業として開拓することが、日本の産業の新しい可能性です。運輸機械のトヨタ、通信機器のソニー、小売のセブンイレブン、通信サーバのNTTドコモなどの先に、新しい学問と新しい芸術というコンテンツ（記録内容）を販売し、健康生活と平和社会へ少しづつ接近していく、未来的な産業があるのではない

始人の素朴さが、未来的に復原されるであろう。マルクスはそのように指摘しています。精神的に丸裸になった素朴な日本民族が、自分の原始時代を基礎とすることは、資本主義の次の、新しい生産体制を追求することと、無関係ではありません。

希望の事業

わたしは、かつてのソ連や東ドイツの誤りのひとつは、国家主義というものから脱出す

ここまで書いてきて、この本の本文の冒頭に書いた、日本の全体的なあきらめムードの問題、中年や老年の大人が希望というものをあまりもっていない問題に、返ります。

わたしは、このあきらめムードの本質は、金融敗戦のあとの、脱亜入欧精神の名残ではないかと、思います。第二次世界大戦で負け、さらに金融敗戦し、それでも、金融と軍事に強いアメリカ文明に追随しようか、どうしようか。そういう迷いであると、思います。

わたしの答えは、すでに述べました。素朴な日本民族は、自分の原始時代を基礎として、お金というものにふりまわされない文化や産業や生産体制を、新しく追求するべきです。

ただし、コンピュータの技術やチェーンストアの技術など、アメリカが発達させた技術の最先端を駆使し、それらの技術を、アメリカ人が発想しにくい新しい目的のために、活用すればよろしい。そういう新しい希望を、ひとりの中年の大人の責任として、若い人たちに提案します。それがこの本です。

新しい学問と新しい芸術を興しつつ、人間ひとりひとりが、やすらぎ、つまり健康生活と平和社会へ少しずつ接近していく。そのプ

ーネットまんが喫茶もよろしいが、そのみに貴重な人生を託せますか。

ロセスこそを、事業化しよう。この本の「大切なまえがき」に書いたように、独学の冥想、親しい人との遠慮のない討論、研究のヒントとしての良質なもののや人や活動の陳列。そういう空間を、「やすらぎ茶室チェーンね（仮称）」を、寂しさから連帯へ！を、ともに創っていこう。これからの困難な時代を生き抜かなければならない若い人たちは、こういう新しいデザインのチェーンストアの大切さを、直観できるはずだ。インタ

ビジョンとは、今は到達できそうにもない、高遠なる到達点のことである。

渥美俊一先生
『商業経営の精神と技術』
(商業界 1988年) より